

## スガノ村井新体制に農機業界の支援を期待する

スガノ農機の混乱が続いている。

既報の通り、6月12日に開催された臨時株主総会でスガノ農機の代表取締役村井仁氏が選任された。

同氏の代表取締役選任は、土を考える会とともに発展してきたスガノの理念を守れという全国土を考える会の会員の希望に応えることでもあった。しかし、株主総会で解任されることを見越した大森聡氏は、総会に先んじて自ら代表を退き、社員の立場で同社に居座る対応をして抵抗を続けている。また、旧役員と一体となつて現在の同社を牛耳っている東京管理職ユニオンが社員をあと、社員との対話を進めようとする村井新社長に対して会社をロックアウトして抵抗している。それ

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

でも、社員のなかには社内でのイジメを恐れて大森一派と行動を共にしているものの、土を考える会会員や筆者との電話で、現在の異常体制を悩んでいる社員も少なからずいる。大森一派のスガノ社内での支配体制は崩れつつあるようだ。

とはいえ、ユーザーからの部品の注文にも十分に対応できない状態が続いており、このままでは同社の経

営破たんも起きかねない。幸いにも同社はこれまで無借金経営を続けており、財務内容が良好であるため、こうした不祥事が続いても当面は会社を維持していくことは可能だろう。

同社の混乱は、単にスガノ農機の経営問題にとどまらず、我が国農業にとつても影響を与えかねない。以下、同社の日本農業に果たしてきた意味、それも大転換を迫られている我が国の水田農業にとつての意味と、同社再建に対する私見を述べてみたい。

多くの読者はご理解いただいていると思うが、筆者は同社三代目社長だった菅野祥孝氏の指導を受け、我が国農業への畑作技術体系導入の意義を知り、本誌もその普及に向けて主張を続けてきた。また、85歳という高齢にもかかわらず、混乱なかで社長を引き受けられた村井仁氏もその技術指導者として、同時に土を考える会の顧問的存在としてリードしていただいている方である。

改めてここで繰り返すまでもないが、我が国の水田農業は、戦後に定着したロータリーによる作業体系からプラウ他の牽引型畑作機械体系への転換がなければ水稲生産のコスト

ダウンにとどまらず、水田の畑地化進展や各種畑作物の生産性向上は望めない。本誌の読者仲間が広がってきている子実トウモロコシ生産も畑作技術体系が前提でない限り、低コスト生産は実現できない。

すでに北海道ではスガノ以外の海外ブランドの畑作機械の普及はあるが、府県では各トラクターメーカーの販売会社でプラウの導入指導のできる営業マンはほんのわずかしかないのが現状である。

スガノは祥孝氏の時代から各地の意欲ある農家に向き、「体験教室」「導入指導」「感謝訪問」という営業コストを度外視して畑作体系定着力を注いできた。それが土を考える会の会員農家を育て、新しい日本農業を創る同志としてのスガノ農機と土を考える会の関係を創ってきた。そして、スガノの営業マンたちにだけではなく、土を考える会の会員農家たちが地域農業の変革の担い手となっているのである。

このつながりを失うことはスガノという会社だけではなく、日本農業にとつての損失なのである。その意味で、スガノの現在に対して各トラクターメーカーにとどまらず、農業にかかわるすべての企業が村井新体制に対して支援の手を差し伸べていただければと思う。